

『日本教育新聞』一九六九年四月五号頃（日本教育新聞社）

時の
話題



教育における対話とは何か

矢口 新

教育における対話の欠如ということが言われる。対話というのは一種のやり言葉で、そういう言葉を使うと何かわかったような気もするが、よく考えてみるとむづかしいことである。

ごく単純に考えて、対話がない教育から、対話のある教育に切りかえるというのは、どうすることなのであろうか。つい最近高等学校の先生と話した際、対話がないと言われるけれど、私も一生懸命対話をしています。ホームルームの時間だって、放課後だってそうしようと努力しています。なるほど、それも対話であろう。しかしその程度で対話を考えるなら、教育に対話がないという批判は、あたらないということになるであろう。対話はあるのである。

もつともその程度の対話すらない教育が、大学などにはありそうである。それはしかし

論外だという人がいるかもしれない。しかしその論外の教育が、現在の大学に横行しているとすれば、それこそが論外である。

だが対話を実現しようとしたら、いったいどうするのか。具体的にはたいへんむづかしいことではないか。大学にもホームルームを設けることになるのか。大学にホームルームができるなどということは、想像しただけでも大変なことであるが。

しかしホームルームで対話をしているという高校の先生や、中学の先生があるにもかかわらず、生徒の側には、先生は対話の相手ではないという意識はとても強いのである。ここにズレがあるのである。ホームルームで対話をすれば、対話が実現するという考え方は、一種の不感症ではないか。生徒はホームルーム以外の教育時間の大部分に対話が存在していないことを不満としているのである。

対話の不在とはまさに、その教育の場における問題であるのに、それが感ぜられないとしたらもはや失格ではないか。

しかしそういうことがわかっていて先生もいる。自分ではできるだけ、教科の時間にも、対話することを考えていると言う。だがそれで実現するほど対話はやさしいことだろうか。五十人の生徒に対して、あるいは三十人に対して、どれだけ対話を実現するのか、そこで実現しうる程度の対話なら、それは今要求されている対話ではないのではないのか。

今要求されている対話とは何かを深く考えてみる必要があるかもしれない。それは、これまでのシステムの中で、できるだけ話し合いをしようとする努力で実現するというものではない。すべての生徒が、時々刻々自分の目の前にある問題と対話する、そこへ先生も一緒に参加する、そこに本当の対話を実現するのであろう。そういう学習の場のシステムは、現代われわれがもっているシステムと根本的にちがうのではないのか。そのシステムの探求が問題なのだ。

（能力開発工学センター常務理事）